

平成 30 年度  
常葉大学 地域連携事業報告書



## 平成 30 年度 地域連携事業報告書 目次

常葉大学地域連携・交流推進基本方針	02
-------------------	----

### 地域交流・連携推進事業（平成 29 年度採択事業）

地域交流・連携推進事業 概要	06
平成 29 年度採択事業一覧	07
1-1. 静岡茶粉末を利用した調理品の酸化抑制に関する研究	08
1-2. トコハのリソースを横断的に活かした浜松市の新たな防災教育への貢献	10
1-3. 漁村コミュニティにおける環境利用の持続可能性に関する研究	12
1-4. 学生による絵本制作を通じた、常葉大学と松崎町の連携プロジェクト	14

### ポスター発表事業

ポスター発表事業一覧	21
2-1. あそぼうあそぼうABC（西奈生涯学習センターとの共催事業）の実施	22
2-2. 小山町との協働事業： 人が訪れ、消費が拡大する観光交流の拡大	24
2-3. 学生による絵本制作を通じた、常葉大学と松崎町の連携プロジェクト	26
2-4. 藤枝体験型インバウンドツアーの企画と PR ビデオ作成	28

## 常葉大学地域連携・交流推進基本方針

〔平成 27 年 12 月 14 日制定〕

### 1. 地域連携・交流の基本理念

常葉大学（以下「本学」という。）の 3 つの教育理念（知徳兼備、未来志向、地域貢献）の実現に資する「ナショナル～ローカルな次元」の地域連携・交流にかかる諸活動を積極的に支援・推進することを通して、「美しい心情をもって、国家・社会・隣人を愛し、堅固な意志と健康な身体をもっていかなる苦難にもうち克ち、より高きを目指して学び続ける」（常葉学園「建学の精神」）人間像の具現化を図るとともに、地域社会の活性化・進展に資するものとする。

### 2. 地域連携・交流の目的

本学が取り組む地域連携・交流は、地域社会の動向やニーズを的確に捉えて、地域社会の人的基盤を支え、地域社会や地域経済の発展等に寄与することを目的として、次に掲げる事業等を展開する。

- (1) 地域の活性化等を担う人材の育成
- (2) 地（知）の拠点としての大学の役割・機能の発揮
- (3) 本学の資源を活かした地域社会に対する協力・支援
- (4) 産官学連携による地域連携・交流事業の展開
- (5) 地域連携・交流に関する学内の機運醸成

### 3. 地域連携・交流の基本原則

本学が取り組む地域連携・交流は、以下の諸原則のもとで行うものとする。

- (1) 効果性：本学の 3 つの教育理念の実現に対し効果的であると認められるもの
- (2) 組織性：全学的ないし学部・学科等の単位で組織的に実施するもの
- (3) 計画性：中長期の展望のもとで計画的に事業を実施するもの
- (4) 公平性：交流事業への参加の機会が学生・教職員に平等に開かれていると認められるもの
- (5) 互恵性：連携先と互恵的な関係性のある事業を実施するもの

### 4. 地域連携・交流の事業内容

本学が取り組む地域連携・交流の事業内容は、次のとおりとする。

- (1) 地域の活性化等を担う人材の育成
  - ① 地域人材の育成のためのカリキュラム・授業内容の充実
  - ② 正課内外での地域貢献活動の実施

- ③ 学生の地域での就労促進
- ④ 卒業生に対する継続的な学習機会の提供
- (2) 地（知）の拠点としての大学の役割・機能発揮
  - ① 教育研究成果の情報発信及び成果還元
  - ② 多様な学習機会の提供
  - ③ 社会への提言活動
  - ④ 学生の人的資源の活用
- (3) 産官学連携による地域連携・交流事業の展開
  - ① 共同研究(商品開発等)の実施
  - ② 地域課題解決のための共同事業の実施
  - ③ 起業及びベンチャービジネス等への支援活動
  - ④ 地域活性化のためのイベント・実践報告会等の実施及び支援
- (4) 地域連携・交流に関する学内の機運醸成
  - ① 実践報告会・シンポジウム等の開催
  - ② 実践事例集の作成・刊行
  - ③ 研究推進、教育改善等に対する連携・交流事業の効果検証

## 5. 地方自治体、各種団体等との連携・交流協定の締結

地域の特性及びニーズに応じた地域連携・交流事業を展開するため、地方自治体、各種団体等との連携・交流協定の締結を促進する。

## 6. 自己・外部資金を活用した地域連携・交流事業の実施

本学の専任教職員が基本理念・基本原則に沿った地域連携・交流活動を主体的に推進することができるよう、学内における助成金の交付、外部資金への応募を促進する。

## 7. 地域連携・交流にかかる推進組織及び環境整備

- (1) 地域連携・交流の充実及び円滑な推進等を図るための学内体制を構築する。
- (2) 地域連携・交流事業の充実を図るため、学内外の関係者から成る連携推進組織を整備・運営するなど、連携推進体制及び環境の構築を進める。



地域交流・連携推進事業  
～平成 29 年度採択事業～

## 地域交流・連携推進事業 概要

本事業は、本学の教職員が個人およびグループで地域住民や関係機関等と連携を図って地域との交流・連携事業の取組みに対して支援（所要経費の一部を交付）をするものです。

### 助成要件及び条件

地域の活性化又は発展に貢献又は寄与するもののほか、次のすべてに該当し、大学としてのメリット又は効果があると認められるものに対して助成をする。

- (1) 事業の効果が本学の教育・研究に反映若しくは還元されるもの又は地(知)の拠点である大学として相応しいと認められるもの
- (2) 本学が主体性をもって実施するもの（単なるボランティア活動又は行事への協力は対象外とする。）
- (3) 一過性のイベントや行事ではないこと
- (4) 地方自治体、民間企業・団体又は地域団体等から資金、人的な支援又は協力等が得られるなど、地方公共団体等との共同又は連携が明らかであるもの

### 助成対象事業

次のいずれかに該当する事業に対して助成をする。

- (1) 地方自治体及び民間団体等と共同又は連携して、地域活性化等を図ることを目的として実施する事業
- (2) 本学の研究成果等を地域に還元又は情報発信（成果の報告又は発表等）することを目的として実施する事業
- (3) 産官学(産学又は官学も含む。)連携により地域や産業の活性化等を図ることを目的として実施する事業
- (4) その他学長が特に認める事業

### 交付対象金額

1 事業に対して、原則として 500 千円を上限とする。



平成29年度 地域交流・連携推進事業 採択事業一覧

No	研 究 テ ー マ 名	採択額 (千円)	代表者
1-1	静岡茶粉末を利用した調理品の酸化抑制に関する研究	350	健康プロデュース学部 池谷 昌枝 准教授
1-2	トコハのリソースを横断的に活かした浜松市の新たな防災教育への貢献	184	社会環境学部 阿部 郁男 教授
1-3	漁村コミュニティにおける環境利用の持続可能性に関する研究	500	社会環境学部 山本 早苗 准教授
1-4	学生による絵本制作を通じた、常葉大学と松崎町の連携プロジェクト	500	造形学部 キムミンジ 講師
1-5	中東遠地域における新たな病病連携モデルの現状と展望に関する調査	134	健康科学部 駒井 裕子 講師
合 計		採択 5件 1,668千円	

## 1-1

# 静岡茶粉末を利用した調理品の酸化抑制に関する研究

### 事業担当者

常葉大学健康プロデュース学部 健康栄養学科 池谷 昌枝（代表）

常葉大学健康プロデュース学部 健康栄養学科 寺島 健彦

常葉大学健康プロデュース学部 健康栄養学科 杉浦 千佳子

### 目的・概要

静岡県は‘お茶どころ’として全国に知られており、茶栽培面積及び収穫量ともに全国の40%を占める。県下では山間部や川の流域に20以上の産地を持ち、お茶の研究には最適の環境といえる。緑茶に含まれるカテキンは疾患予防や病態改善に役立つ抗酸化物質として近年注目されており、抽出液ではなく茶葉そのものを摂取することでより効率的なカテキンの摂取が見込まれる。そのためには茶葉を摂取し易い形状にしておくてはならず、粉末化技術が重要である。浜松キャンパスの近郊に製造工場を構える『やまと興業（株）』では静岡県産の茶葉を独自の技術により超微粒子粉末に加工し販売している。その特徴は茶葉の温度を95度以下に保ちながら加工することでカテキンの酸化を最小限に抑えた‘低温・無酸化製法’である。今回申請する事業に関連したこれまでの取り組みでは2015年に本学健康栄養学科学生とやまと興業（株）が連携し、べにふうきゼリー（やまと興業社製）を利用した料理レシピの開発を行い、HPにて紹介をしているが、健康増進効果を言及するには至っていない。そこで本事業では「やまと興業株式会社」をはじめとし、「ひしだい製茶株式会社」、「日本農産株式会社」の近隣企業3社の粉末茶と、「有限会社三和畜産（とんきい）」の食肉を調理に用い、食品中の脂質の酸化が抑制されるかどうかを検証し健康増進に役立てたいと考えた。脂質を含む食品は加熱温度や時間経過とともに酸化が進むと品質が劣化する。また、酸化の進んだ食品は健康にも悪影響を及ぼすことが推測される。本事業において粉末茶が加熱調理食品の酸化を抑制することが明らかになれば、地域交流・地域連携を出発点とした健康増進事業の一助となることが見込まれる。

### 事業内容・方法

本事業では、粉末茶をハンバーグに混ぜ込み加熱および時間経過に伴う脂質酸化の変化を検証した。

**1 官能評価：**粉末茶の混合量と食味への影響を検討するため、学生ボランティア28名をパネリストとして官能評価を行った。試料はやまと興業のべにふうき（y-べに）をハンバーグ1個あたり1.2g、2.4g、3.6g、4.8gの4段階の濃度で混ぜ込み、真空低温加熱した。ハンバーグは約10gにカットし、粉末茶の種類、濃度ごとに評点法により味や香りなどの項目を総合的に評価した。

**2 酸化度の評価：**評価指標はTBA(Thiobarbituric-acid)値を用い、以下の3条件で分析を行った。

①第一分析：やまと興業のべにふうき（y-べに）、やまと興業のやぶきた（y-やぶ）、日本農産のからべに（n-べに）、日本農産のやぶきた（n-やぶ）、ひしだい製茶のべにふうき（h-べに）、ひしだい製茶のやぶきた（h-やぶ）の粉末茶を用い、ハンバーグ1個あたり1.2g、2.4g、3.6g、4.8gの4段階で配合し真空低温調理した。

TBA 値は加熱前、加熱直後、4℃冷蔵保存 3 日後、4℃冷蔵保存 7 日後で測定した。

②第二分析：(y-べに)を用い、ハンバーグ 1 個あたり 0.6g、1.2g の 2 段階の配合および粉末茶配合無しの対照を作成し、IH 調理器でフライパンによる加熱(蓋をしない乾式加熱)を行った。TBA 値は加熱前、4℃冷蔵保存 1 日後、4℃冷蔵保存 3 日後、4℃冷蔵保存 7 日後に測定した。

③第三分析：(h-べに)、(h-やぶ)、(n-べに)、(n-やぶ)を用い、ハンバーグ 1 個あたり 0.6g、1.2g の 2 段階の配合および粉末茶配合無しの対照を作成し、ガス調理器でフライパンによる加熱(加水して蓋をする湿式加熱)を行った。TBA 値は加熱前、加熱直後、4℃冷蔵保存 3 日後、4℃冷蔵保存 7 日後に測定した。

**3 TBA 値測定方法：**TBA 法により脂質の酸化度を測定した。ハンバーグ試料 8g に 5 倍量の蒸留水 40mL を試験管に取り、7000rpm、90 秒間ホモジネートを行い、遠心分離後、上清をろ過し、測定用試料とした。測定用試料 1ml と TBA 試薬 2ml を試験管に加え、沸騰水浴中で 15 分間加熱し、冷却後、遠心分離し、上澄み液の 535nm の吸光度を測定した。TBA 試薬の調整は、トリクロロ酢酸 15g とチオバルビツール酸 0.375g を蒸留水に完全溶解し、100ml にメスアップした。また、標準溶液には、1,1,3,3-Tetraethoxypropane を用いた。

## 事業成果

- 1 官能評価の結果より、粉末茶をハンバーグに混ぜ込む場合の限量は 2.4g/個と見込まれた。
- 2 第一分析では、真空低温調理による酸化抑制が粉末茶の効果を見えにくくした可能性があるが、「べにふうき」のほうが「やぶきた」よりも結果のばらつきが少ないことや、1.2g でも酸化抑制効果が見込まれることがわかった。第二分析では一般家庭の調理を想定したフライパンによる乾式加熱を行い、粉末茶 0.6g と 1.2g では加熱前から加熱後 7 日後まで TBA 値の上昇が認められず、酸化抑制に差がなかった。しかし、茶を入れない対照は 7 日後には加熱前の約 2 倍の TBA 値となった。第三分析ではフライパンに加水し蓋をする湿式加熱を行い、「べにふうき」と「からべに」では粉末茶の量による日数経過の違いはみられなかった。「やぶきた」では、日数の前半では 1.2g のほうが 0.6g よりも TBA 値は低く、7 日後ではひしだい製茶でほぼ同一、日本農産で 1.2g のほうが TBA 値が高くなるという結果であった。第三分析の結果には、フライパンの加熱温度が第二分析よりも低かったことが影響していると思われる。
- 3 結論は以下の 3 つとしてまとめられた。

- ① ハンバーグを一般家庭用のフライパンで蓋をせずに加熱すると、粉末茶を入れない場合は冷蔵保存中の日数の経過により脂質酸化は亢進するが、粉末茶を入れた場合は酸化が抑制されることがわかった。
- ② ハンバーグ 1 個あたりに入れる粉末茶の量は、やまと興業で販売されている 1.2g スティックまたは 1/2 スティックでも酸化抑制効果が期待できると考えられた。
- ③ 加熱の方法により試料にかかる温度が異なり、脂質の酸化度合に影響を及ぼす可能性が示唆された。

## 今後の展開

本研究で得られた成果は、今後、学会発表および大学 HP への掲載等を予定している。また連携企業へも結果を報告し、今後の更なる活用を検討する。特に、第二分析結果で示した粉末茶による酸化抑制効果は、一般家庭においても取り入れることができ、地元の商品を利用した健康増進効果が期待できるメニュー開発などへ貢献できるのではないかと考える。さらに今後は今回の研究で得られた内容を深め、ハンバーグの加熱方法や検体抽出方法の検討を行い、脂質酸化抑制に関するデータを集積していけるよう努めていきたい。

## トコハのリソースを横断的に活かした 浜松市の新たな防災教育への貢献

### 事業担当者

代表者：阿部郁男（社会環境学部・社会環境学科・教授）  
 共同申請者：重川希志依（社会環境学部・社会環境学科・教授）  
 田中 聡（社会環境学部・社会環境学科・教授）  
 木宮敬信（教育学部・生涯学習科・准教授）  
 佐藤由美（経営学部・経営学科・准教授）

### 目的・概要

事業代表者である阿部が平成25年度より浜松市教育委員会の学校防災アドバイザーとして浜松市における学校防災プロジェクトの立案や実施に携わってきた。平成25年度には学校・園の防災対策基準を策定し、平成26年度にはその基準に基づく中学校区単位の危機管理マニュアルの整備にかかわってきた。平成27年度には浜松市学校（園）防災グランドデザインの策定にも係わり、現在、このグランドデザインに基づいて5年計画で各種施策を推進中である。それらの活動の中で、これまでの“個人と組織”の関係から“組織と組織”の関係に発展させたいと考え、平成28年度には社会災害研究センターも参画を図った。平成29年度には、社会災害研究センターに属する防災関係の教員だけでなく、学部横断的に関係を展開することにより、地域に根差した防災教育への更なる貢献を進めるとともに本学の取り組みを広く地域に訴求することを本事業の目的とした。

### 事業内容・方法

これまでの活動では、教職員研修会などの講演、学校防災計画の見直しなどに携わってきた。当該事業では、学校での防災教育を推進するために、発達段階に応じた防災教育の在り方を検討して防災教育のための副読本である「防災ノート」の原案作成を支援するとともに、防災ノートの多言語化に本学の語学担当教員が参画することによって、学部横断的な活動としたいと考えて事業を推進した。

### 事業成果

本事業の成果を以下の項目に分けて報告する。

#### ① 学校（園）防災対策プロジェクト会議への出席

本会議は、校長、園長、教頭などの各役職の代表と、学校防災リーダー、市・区役所の関係部署で構成され、浜松市の学校防災に関する計画等を策定するものである。この会議が5月26日、10月17日、1月31日に開催され、防災ノートの内容や活用、防災対策基準の見直しなどが議論された。当該会議

には事業代表者である阿部が出席し、これらの検討に対して防災に携わる専門的な知見からアドバイスを行った。

## ② 学校（園）防災リーダー育成研修会

各校に配置される学校防災リーダーの育成研修会が6月23日、11月24日に開催され、事業代表者である阿部が出席した。

## ③ 学校（園）防災サポート事業に基づく学校訪問

防災サポート事業は、専門家が直接学校現場に赴いて現地の状況を把握するとともに、学校・地域のそれぞれの特徴を踏まえた防災対策を実施するために、学校の教職員、地域の自治会の皆様と防災に関して意見交換を行う場である。本年度は、4つの学校（園）を次の日程で訪問した。訪問者は、阿部、重川、木宮である。前年度は9回の訪問に留まっていたが、本年度は11回、訪問することができた。

気賀小学校： 7月14日、 8月 4日、 8月 8日、10月31日

二俣小学校： 6月19日、 8月 8日、10月31日

雄踏中学校： 5月29日、 7月13日、11月28日

白脇幼稚園： 2月28日

## ④ 防災ノートの作成支援および多言語化

防災ノートの内容については阿部、重川、田中、木宮がそれぞれの知見に基づき助言を行うことができた。また、防災ノートによる防災教育の試行を気賀小学校で行った際、木宮が現地にて監修に携わった。この防災ノートは平成30年度より本格的に利用され始めているが、東日本大震災において石巻市立大川小学校で多くの犠牲者が出てしまったことを教訓として大きな社会的関心が寄せられており、静岡第一テレビ、静岡あさひテレビ、静岡新聞など多くのメディアで取り上げて頂いた。なお、SBSでは防災ノートを活用した防災教育を全国放送（ニュース）で取り上げて頂いたことから、兵庫県、広島県から問い合わせを頂いた。

多言語化については、外国語学部の一宮先生、増井先生、江口先生にもご協力を頂いて、外国語学部の学生がスペイン語、ポルトガル語への翻訳を担うことを検討したが、実施可能な時期が浜松市のニーズに一致しなかったことにより実現することができなかった。一方、英語については佐藤が実施し、現在、英語版の作成手順について浜松市の方で検討頂いている状況である。

### 今後の展開

学校防災プロジェクト会議、学校防災リーダー育成研修、学校現場での防災教育の実践など、今後も継続してゆくと考えられるので、本学の教員の専門分野を活かして貢献できる分野については引き続き協力関係を継続してゆきたいと考える。また、これまで取り組んできた成果を他地域にも知ってもらえるように学会発表を予定している。

1-3

## 漁村コミュニティにおける環境利用の持続可能性に関する研究

### 事業担当者

社会環境学部 社会環境学科 山本早苗（代表）

保育学部 保育学科 稲葉光彦

### 目的・概要

本事業は、県内でもっとも人口が少なく、過疎化・高齢化が急速に進む西伊豆・松崎町を事例に、漁村コミュニティにおける持続可能な環境利用のしくみを明らかにすることを目的とする。また、ボランティア活動を通じて、地域の生活文化を次世代へと継承するための実践的な場づくりに取り組んだ。

### 事業内容・方法

#### 1. 持続可能な環境利用を通じたコミュニティづくりに関する調査

- ・松崎町が長年取り組んできた「グリーンツーリズム事業」、「石部棚田の保全活動」、「農産物の地域ブランド化」、「企業の社会貢献事業（CSR）」を事例に、地域資源を生かした持続可能なコミュニティづくりの現状と課題について調査を行った。
- ・松崎町企画観光課、松崎町観光協会、石部棚田保存会、地域住民を対象に聞き取り調査を行った。予備調査（7月1～2日）、本調査（9月11～13日）を実施し、報告書を作成した。（予備調査については、造形学部のキム・ミンジ先生のプロジェクトと同日程で実施し、情報交換を行った）

#### 2. 体験プログラムとイベントの企画・運営

- ・域学連携による体験プログラムとイベントの企画・運営を行った（松崎町、石部地区棚田保全推進委員会、石部こらっしやい会、石部地域づくりの会、地域住民との協働）。  
- 7月1～2日（草取り、大地曳網祭り）、10月7～8日（稲刈り、収穫祭）、11月11日（棚田音楽祭）

#### 3. 成果発表

- ・『棚田学会誌』18号にて、常葉大学「ふじとこ伊豆プロジェクト」による石部棚田保全活動の内容を紹介した論文が掲載された。2017年度卒業生、社会環境学部 小湊航・藤原広大による共著。
- ・2018年2月20日に、松崎町の交流拠点である「ふれあいと一ふや」にて「成果報告会」を開催し、研究成果をポスター形式で発表するとともに、石部棚田保全ボランティア活動を紹介するパネル展を実施した。松崎町役場、調査協力者、静岡大学の教員・学生が報告会に参加してくださり、今後の調査研究や実践活動を展開していくための有益なアドバイスを多く得ることができた。

## 事業成果

### 1. 地域の生活文化の記録と継承

- ・松崎町の伝統的な自然利用や観光化による生活文化の変化を丁寧に記録し、報告書にまとめて調査協力者に配布した。
- ・石部の伝統行事である「大地曳網祭り」において、学生たちが祭りの担い手として運営に参画するとともに、地域の伝統的な漁法や多様な生活組織について学びを深めた。
- ・本事業の成果報告書については、フィールドワークの技法を実践的に学ぶテキストとして活用する予定である。具体的には、専門科目「社会調査Ⅱ」および「ボランティア実習」にて使用するとともに、専門科目「ゼミナール」の副読本として活用する。

### 2. 学生のプロジェクト企画運営力の涵養

- ・継続的な棚田保全活動の実施やイベントの企画・運営を通じて、学生リーダー（3年生）が中心となり、プロジェクトごとに組織化を図り、組織運営マニュアルを作成した。学生たちが、地域住民と直接連携して企画・運営を担うことにより、継続的な活動を支える基盤が整った。
- ・前年度の卒業生の研究成果を踏まえて、3年次から2年間かけて松崎町でフィールドワークに取り組んだ。その結果、研究内容を深めることができ、継続的に研究成果を地域に還元することができた。各自が、主体的に調査の企画・設計を行うことで、マネジメント力とコミュニケーション力を涵養することができた。

### 3. 活動成果と調査成果の地域への還元

- ・調査成果をまとめた報告書を作成し、調査協力者をはじめ近隣地区住民と関係者にも配布して、地域づくりの基礎データとして活用してもらえるようにした。
- ・調査と体験プログラム・イベントの企画運営を通じて、学生の視点から地域資源を発掘するとともに、地域の記憶や伝統文化を記録し、地域内で世代間継承する場を創出することが可能になった。
- ・事業成果については、ホームページやフェイスブック等を活用して広報を行うとともに、幅広く活動内容を発信することができた。

## 今後の展開

- ・これまでは富士キャンパスを主体とした活動であったため、草薙キャンパス移転を契機に、プロジェクト名を「とこは伊豆プロジェクト」に改称し、他学部や他大学（すでに松崎町で調査研究や地域連携事業を実践している静岡大学や早稲田大学等）との連携を積極的に行い、活動の幅を広げる予定である。
- ・2018年度は、石部棚田保全活動15周年に当たるため、これまでの活動の成果を総括し、今後の調査研究や実践活動のあり方について考えるシンポジウム等を実施したいと考えている。
- ・廃校「旧三浦小学校」および廃園「旧三浦幼稚園」の利活用を通じた交流拠点の形成について、行政、地域住民、大学、NPO等のワークショップを行う予定である。すでにプラットフォームや中間支援センターの創設をはじめ、体験プログラムの充実（皮むき間伐や磯文化体験など流域を活かした体験プログラム作り）について、話し合いを始めている。

1-4

## 学生による絵本制作を通じた、常葉大学と松崎町の連携プロジェクト

### 事業担当者

造形学部 キム ミンジ（代表）、チラユ ポンワルット、垂見 幸哉、合津 正之助

### 目的・概要

「常葉大学と松崎町の包括連携協定締結に関する推進事業」を元に松崎町のブランディングからさらに発展させ、松崎町をモチーフとした情報発信・PRの為に絵本を制作する。

### 事業内容・方法

松崎町と常葉大学は包括連携協定締結を行っていることから、今年は大きなテーマを「松崎町の絵本」とし、平成29年度地域連携推進事業の申請を行った。プロジェクトには常葉大学造形学部デジタル表現デザインコース3年生、タイのシラパーコン大学のビジュアルコミュニケーションデザインコースの学生たちが参加し、造形学部講師キムミンジ(代表)を中心にその指導にあたった。学生たちはプロジェクトが始まった7月から11月末まで、松崎町をテーマにしたオリジナル絵本をそれぞれ制作し、12月には完成した絵本を松崎町の伊豆の長八美術館1F、伊豆文邸、常葉大学3号館の3Fギャラリーで展示及び発表した。

なまこ壁や、伊豆の長八美術館、国指定重要文化財岩科学校、旧依田邸などの観光地として有名である松崎町に、さらに関心と理解を高めるため「絵本」というジャンルを選んだ。絵本は老若男女を問わず、幼い頃から誰でも慣れ親しんだジャンルである。イラストレーションだけではなく、ストーリーとデザインまでが調和すると、読者はこれらを通じて絵本の中の世界に入り込むことができる。このような絵本が持つメディアの特徴を活かし、松崎町を題材にしたお話や昔から語り継がれてきたお話を、学生が現地で取材しながら絵本プロジェクトを進行した。

2017年9月11日から12日まで造形学部デジタル表現デザインコース3年生23名、10月8日から9日はシラパーコン大学ビジュアルコミュニケーションデザインコース3、4年生5名が、造形学部教員キムミンジ、チラユポンワルット、垂見幸哉と共に松崎町を訪問、取材した。学生たちは自発的に本人が制作したい絵本の分野(フィクション、ノンフィクション)と読者の対象を設定し、それに合わせ取材を行った。町の積極的な協力に支えられて町の住民たちにインタビュー及び取材し、松崎町の名所と住民にしか知られていない場所を直接訪ねながら取材、調査を進めた。

### 実施内容

7月 プロジェクト開始及び制作

8月 松崎町訪問（キム、チラユ）

9月 松崎町訪問・取材及び制作（造形学部デジタル表現デザインコース3年生23名、キム、チラユ、垂見）

10月 松崎町訪問・取材及び制作（シラパーコン大学の学生5名、キム、チラユ）

11月 絵本制作完成

12月 絵本展開催（常葉大学造形学部デジタル表現デザインコース3年生17名、シラパーコン大学の学生5名、キム、チラユ、垂見、合津学部長）



事業成果

①完成したオリジナル絵本 22 冊(常葉大学造形学部デジタル表現デザインコースの学生 17 名、タイのシラパーコン大学の学生 5 名)を 12 月に松崎町の伊豆の長八美術館 1F、伊豆文邸、常葉大学瀬名 3 号館の 3F ギャラリーで展示及び発表した。終了後、松崎町内の図書館と各主要機関に寄贈して町を訪れる人たちや住民たちが絵本を閲覧できるようにした。



② 6月1日から2日まで常葉大学造形学部学生作品 絵本の読み聞かせ参加および展示。

・共催：FULL-SATO プロジェクト実行委員会、NPO 法人伊豆学研究会・後援：松崎町、松崎町観光協会（一財）松崎町振興公社

・発表作品：大村勇貴作「うーちゃんのまつざき」江寄琴  
美作「マーくんやさしいおぼけ・読み手：稲葉待子さん  
石田初恵さん（松崎町住民）

今後の展開

①社会環境学部山本早苗先生と本学部チラユポンワルト先生との協力により発展的プログラム実施予定。

②松崎町と連携し、歴史や伝承をモチーフとした情報発信・PRの為の作品を制作する。

メモ

メモ



# その他 地域連携活動

## ～ポスター発表事業～



## ポスター発表事業 一覧

No	事業テーマ	代表者	連携先
2-1	「あそぼうあそぼうABC」 (西奈生涯学習センターとの共催事業)の実施	教育学部 永倉 由里 教授	西奈生涯学習センター
2-2	小山町との協働事業: 人が訪れ、消費が拡大する観光交流の拡大	経営学部 竹安 数博 教授 経営学部4年生 久保田 麻友	小山町
2-3	学生による絵本制作を通じた、常葉大学と松崎町の連携プロジェクト	造形学部 キム ミンジ 講師	松崎町
2-4	藤枝体験型インバウンドツアーの企画とPRビデオ作成	短期大学部保育科 鈴木 克義 教授 外国語学部3年生 木野 結生	藤枝市

## 2-1

# 「あそぼうあそぼうABC」 (西奈生涯学習センターとの共催事業) の実施

### 事業担当者

教育学部 初等課程 永倉由里

教育学部 初等課程 鈴木亜良太(学生代表) 他

### 目的・概要

小学1年生、2年生を対象とする①クイズ、ゲーム、②パネル・シアター・絵本、③協力学生の専攻・特技を活かした内容の子ども英語活動を行う講座「親子であそぼうABC」の実施(西奈生涯学習センターとの共催、詳細については担当者大川様と調整済)。

同時に小学校での英語指導を担当することになる学生にとっては、格好の実践の場となる。

### 事業内容・方法

静岡市広報誌「しずおか気分」およびWeb上で募集し抽選で選ばれた20名の1、2年生を対象に英語講座を開講する。

第1期: 8月9日(木)、16日(木)、23日(木) 10:30~11:30

第2期: 12月12日、12月19日、1月16日

#### <地域との連携>

西奈生涯学習センター(〒420-0911 静岡市葵区瀬名2丁目32番43号 TEL: 054-265-2468)と共催。

#### <学内外への配信>

1. 大学のホームページに実施報告(記事と写真)を掲載する。
2. 静岡新聞社等に取材依頼を出す。
3. 大学祭にて、「トコハであそぼうABC」を企画・開催する(検討中)。
4. 講座の様子を録画・編集し、「小学校英語指導Ⅰ」「小学校英語指導Ⅱ」で参考資料とする。
5. 小学校英語指導に関する研究に取り組むゼミ(担当: 永倉)の開講を目指す。

### 事業成果

第1期が無事終了。応募者は200%で人気の講座。第2期での実施を準備中。

### 今後の展開

1. 第2期「もっとあそぼうABC」開催決定(12/12, 12/18, 1/16)
2. 有志学生をさらに受け入れ、来年度以降も継続できる体制を作る。
3. 学生の意見・発想を同講座の内容、教材教具の作成、研修、録画・編集等に反映させる。
4. 教材・教具(パネル・シアター、絵本等に関する研究および研修(講師招致)への参加
5. 大学祭での「トコハであそぼうABC」を企画・開催する(検討中)。



# あそぼうあそぼう ABC

小学 1、2 年生(20 名)を対象とする子ども英語あそびの講座の企画・運営



## 「パネル・シアター」

身近にあるものを視覚的に確認しつつ、英語を使って考えてみることで、視覚と聴覚の2つの方向から英語に触れることを目的とした。

また、ストーリー性を持たせることで、子どもたちの興味をひきつけることができた。

## 「どっちが好き？ゲーム」

子どもたち自身が、自分たちの感情を入れながら、実際に英語を発音してみる経験になった。

子どもたちが、自分が好きだと思ったものを英語でどう発音するのかを学生に尋ねているような場面もあり積極的な学びが見られた。



## 「手遊び（グーチョキパー）」

子どもたちも一度はしたことがある手遊びを英語でやってみることで、英語に対する子どもの苦手意識を軽減することができた。

右手と左手で出来た形が何であるかを考え、さらに英語でどう表現するかを考えた。



教育学部 1年 鈴木亜良太



教育学部 1年 田中杏樹



教育学部 1年 大冢綾乃



教育学部 1年 滝口大生



教育学部 1年 堀内美咲



教育学部 1年 森下佳樹



教育学部 4年 相見佳輝

他 14 名

もっとあそぼう ABC 12/12, 12/19, 1/16 決定

## 2-2

# 小山町との協働事業： 人が訪れ、消費が拡大する観光交流の拡大

### 事業担当者

経営学部竹安数博研究室 4 年久保田麻友、小鴨菜生、丸山直美、安部史織、三宅満里奈、3 年鶴牧咲良、朝比奈一美、大西亜美、

日本大学短期大学部大久保あかね研究室 2 年近藤舞奈、中澤希、来栖真奈、関美和、望月良之助 他  
協働先：小山町建築部商工観光課、御殿場 DMO、勝間田仁氏、ブリーズ東京、道の駅ふじおやま 等

### 目的・概要

- ・静岡県駿東郡小山町の観光交流振興を目的とする
- ・とりわけインバウンド観光客をターゲットとする振興策を検討する
- ・小山町の特徴（金太郎生誕の地である、世界文化遺産の富士山の麓である、富士スピードウェイ、ゴルフ場など、自然環境に恵まれている等）を活かす
- ・将来計画（工業団地、住宅団地、複合観光施設、宿泊施設等を整備する「三来拠点事業」）がある
- ・海外からのインバウンド観光客を意識した着地型旅行商品の企画を行う
- ・地域資源の調査を通して、小山町の新たな魅力を掘り起す
- ・町民の受け入れ態勢の整備、町民が自慢できる町づくりにつなげる提言を行う

### 事業内容・方法

- ・研究期間：平成 29 年 7 月 10 日～平成 30 年 3 月 4 日
- ・実施場所：小山町役場・小山町周辺観光施設等
- ・実施項目：小山町観光資源調査（9 月 11－12 日）、資源調査報告会（9 月 12 日）  
インバウンド観光客モニターツアー（11 月 18 日）
- ・活動報告：ふじのくに A&S フェア（11 月 30 日）、地域大学コンソーシアム報告会（2 月 17 日）  
小山町 DMO フォーラム（3 月 4 日）

### 事業成果

- ・小山町においてインバウンド観光客をターゲットとした観光交流の可能性を確認
- ・インバウンド観光客の高評価は、農家訪問、神社での参拝、餅つきなどの体験
- ・町民との交流、生活文化、などの地域との連携が小山町らしさを際立たせる

### 今後の展開

本事業は平成 28 年度から継続するものである。初年度は、道の駅「ふじおやま」における新商品開発に取り組み、2 年目はインバウンド観光客を対象とした地域観光資源の棚卸とモニターツアーの検証を行った。本年度は小山町のメインキャラクターである「金太郎」を活用したプロモーションの手法を開発する事業が進行中である。（以上）

# 人が訪れ、消費が拡大する観光交流の振興

Tactics to attract more tourists to Oyama city and to stimulate its economy



久保田麻友、小鴨菜生、丸山直美、安部史織、三宅満里奈、竹安数博、大久保あかね 他

常葉大学 経営学部 経営学科(富士) 竹安ゼミ E-mail takeyasu@sz.tokoha-u.ac.jp

協力：静岡県ふじの国大学コンソーシアム、勝間田仁様、株式会社ふじおやま、BreathTOKYO、小山町経済建設部商工観光課、御殿場 DMO

## 【研究の背景と目的】

金太郎生誕の地である小山町は、世界文化遺産の富士山や富士スピードウェイ、ゴルフ場等の観光施設に加え、水と緑豊かな自然環境に恵まれている。

また今後は工業団地、住宅団地、複合観光施設、宿泊施設等を整備する「三来拠点事業」が進められ、来訪者の拡大が予想される。一方で町民を核とした来訪客受入態勢の整備が課題となっている。

本研究は、海外からのインバウンド観光客を意識した着地型旅行商品の企画や、地域資源の調査を通して、小山町の新たな魅力を掘り起し、受け入れ態勢の整備や小山町民が自慢できる町づくりにつなげることを目的とする。



## 【研究の方法とこれまでの活動】

小山町観光資源調査(2017年9月11・12日)

調査対象：道の駅ふじおやま、道の駅すばしり、富士スピードウェイ、あしがら温泉、富士乃ぼろ華園ホテル、足柄SAの6件

調査内容：小山町周辺施設の視察、外国人団体旅行者への対面調査

観光資源調査では、「商品構成」「商品・施設の見せ方」「文化」「人的対応(外国語対応者の有無)」「デジタル対応(wifiの有無含む)」「パンフレット(多言語対応の有無)」「その他(施設までの案内・日本らしさ・統一感)」など7つの視察ポイントを設定、調査した。富士之堡華園ホテルでは2組の外国人団体ツアーに取材し、初回来訪者が多いこと、ツアーのルートなどを聞くことができた。日本語がわからなくて困っているとの意見もあった。



調査内容を踏まえて、以下のように小山町観光モニターツアーを行った。

小山町観光モニターツアー(2017年11月18日)  
台湾人家族、韓国人留学生(常葉大生含む)  
19人参加

### 【小山町観光ツアー内容】

- ・農業体験①(日本文化について)  
@小山町の農家さん
- ・農業体験②(おにぎり、猪汁、蟹汁を作る)
- ・正式参拝@八王子神社
- ・餅つき、大福作り@ふじあざみ

\*バスの中では、小山町の紹介とクイズ形式の特産品紹介、富士山情報などで交流



お餅つきに惹かれました！

おにぎり作りや餅つき・大福作りが楽しかった！

日本の友達と会って対話したり、日本語を使って話せたりできるから参加した

農家さんでの日本文化については、とても勉強になりました



農家さんのお宅に行けて小山町のもを食べることができてとてもいい機会でした

静岡県といえば富士山ですが、富士山以外のことも知りたいため参加させていただきました

小山町を散歩してみたかったです！すごく楽しいツアーでした

## 【結果・考察】

9月の観光資源調査をもとに、観光モニターツアーを行った。

観光モニターツアーでは、日本の文化・小山町の特産物を体験することによってツアー内容の印象が強くなり、小山町の特産物を知るきっかけとなった。

調査とツアーをもとに、全世代のことを考えることが大切だと思われる。

事前に日本で体験したいことを調査し、小山町と結び付けられるような着地型旅行商品を作りたいと思う。

今後も小山町の地域の魅力や個性を伝える施設として、小山町活性化を盛り上げる活動に繋げていきたい。

このツアーなら、5000円払ってでも参加したいと思います！

2-3

## 学生による絵本制作を通じた、常葉大学と松崎町の連携プロジェクト

### 事業担当者

造形学部 キム ミンジ（代表）、チラユ ポンワルット、垂見 幸哉、合津 正之助

### 目的・概要

「常葉大学と松崎町の包括連携協定締結に関する推進事業」を元に松崎町のブランディングからさらに発展させ、松崎町をモチーフとした情報発信・PRの為に絵本を制作する。

### 事業内容・方法

2017年9月11日から12日まで造形学部デジタル表現デザインコース3年生23名、10月8日から9日はシラパーコン大学ビジュアルコミュニケーションデザインコース3、4年生5名が、造形学部教員キムミンジ、チラユポンワルット、垂見幸哉と共に松崎町を訪問、取材した。学生たちは自発的に本人が制作したい絵本の分野（フィクション、ノンフィクション）と読者の対象を設定し、それに合わせ取材を行った。町の積極的な協力に支えられて町の住民たちにインタビュー及び取材し、松崎町の名所と住民にしか知られていない場所を直接訪ねながら取材、調査を進めた。

7月：プロジェクト開始及び制作 / 8月：松崎町訪問（キム、チラユ）

9月：松崎町訪問・取材及び制作（造形学部デジタル表現デザインコース3年生23名、キム、チラユ、垂見）

10月：松崎町訪問・取材及び制作（シラパーコン大学の学生5名、キム、チラユ） / 11月：絵本制作完成

12月：絵本展開催（常葉大学造形学部デジタル表現デザインコース3年生17名、シラパーコン大学の学生5名、キム、チラユ、垂見、合津学部長）

### 事業成果

①完成したオリジナル絵本22冊（常葉大学造形学部デジタル表現デザインコースの学生17名、タイのシラパーコン大学の学生5名）を12月に松崎町の伊豆の長八美術館1F、伊豆文邸、常葉大学瀬名3号館の3Fギャラリーで展示及び発表した。終了後、松崎町内の図書館と各主要機関に寄贈して町を訪れる人たちや住民たちが絵本を閲覧できるようにした。

②6月1日から2日まで常葉大学造形学部学生作品 絵本の読み聞かせ参加および展示

・共催：FULL-SATO プロジェクト実行委員会、NPO 法人伊豆学研究会・後援：松崎町、松崎町観光協会（一財）松崎町振興公社・大村勇貴作「うーちゃんのまつざき」江寄琴美作「マーちゃんとやさしいおばけ」読み手：稲葉待子さん 石田初恵さん

### 今後の展開

社会環境学部山本早苗先生と本学部チラユポンワルット先生との協力により発展的プログラム実施予定。松崎町と連携し、歴史や伝承をモチーフとした情報発信・PRの為に作品を制作する。





# 学生による絵本制作を通した、 常葉大学と松崎町の連携プロジェクト

## < 事業担当者 >

造形学部 キム ミンジ (代表)、チラユ ボンワルット、垂見 幸哉、合津 正之助

## < 目的・概要 >

「常葉大学と松崎町の包括連携協定締結に関する推進事業」を元に松崎町のブランディングからさらに発展させ、松崎町をモチーフとした情報発信・PR の為の絵本を制作する。

## < 事業内容・方法 >

2017年9月11日から12日まで造形学部デジタル表現デザインコース3年生23名、10月8日から9日はタイのシラバーコン大学ビジュアルコミュニケーションデザインコース3、4年生5名が、造形学部教員キムミンジ、チラユボンワルット、垂見幸哉と共に松崎町を訪問、取材した。学生たちは自発的に本人が制作したい絵本の分野(フィクション、ノンフィクション)と読者の対象を設定し、それに合わせ取材を行った。町の積極的な協力に支えられて町の住民たちにインタビュー及び取材し、松崎町の名所と住民にしか知られていない場所を直接訪ねながら取材、調査を進めた。

・7月：プロジェクト開始及び制作

・8月：松崎町訪問(キム、チラユ)

・9月：松崎町訪問・取材及び制作(造形学部デジタル表現デザインコース3年生23名、キム、チラユ、垂見)

・10月：松崎町訪問・取材及び制作(シラバーコン大学の学生5名、キム、チラユ)

・11月：絵本制作完成

・12月：絵本展開催(常葉大学造形学部デジタル表現デザインコース3年生17名、シラバーコン大学の学生5名、キム、チラユ、垂見、合津学部長)

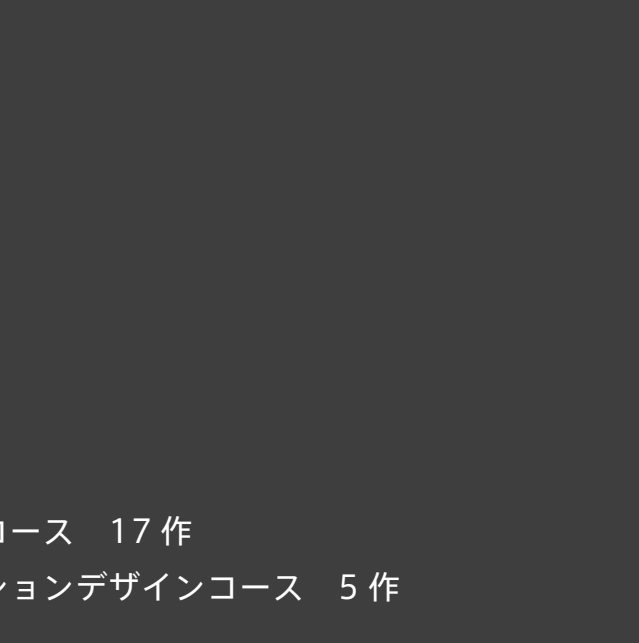
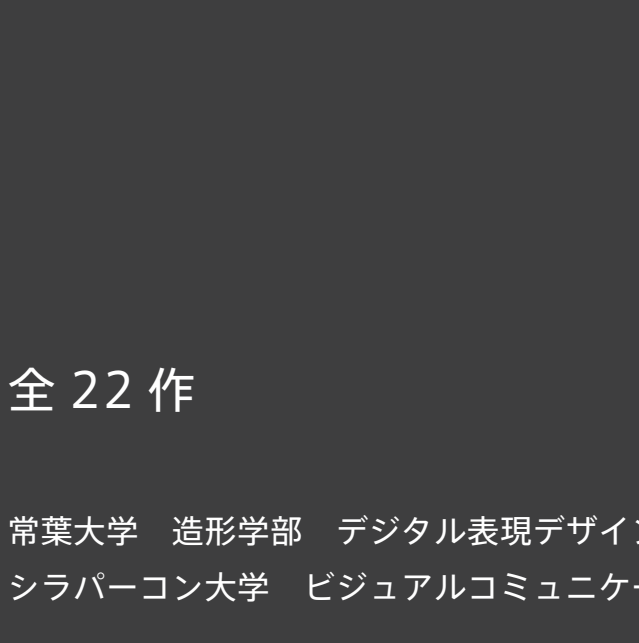
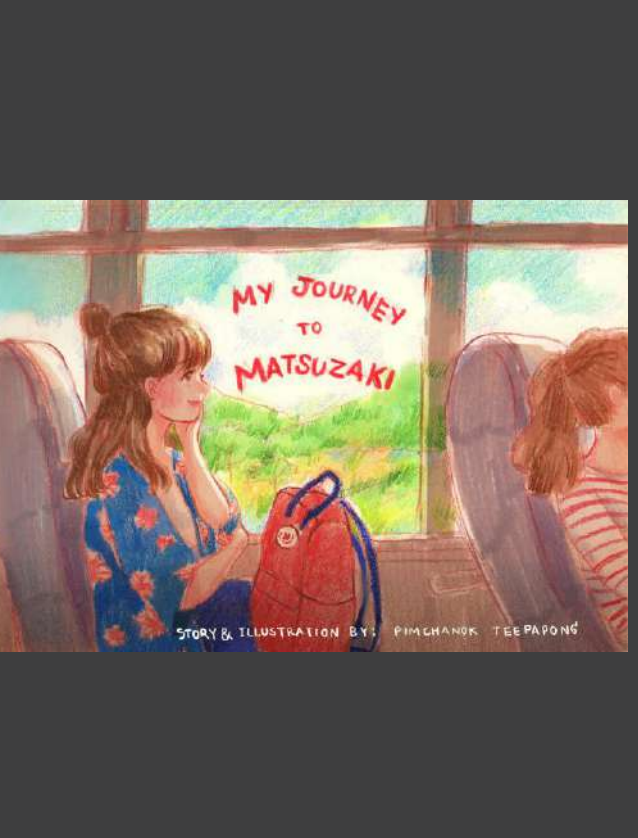
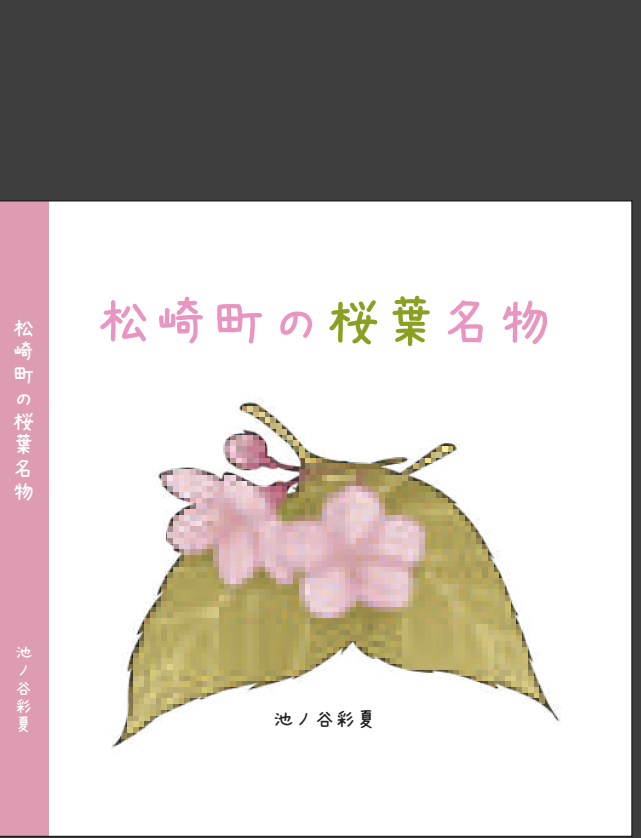
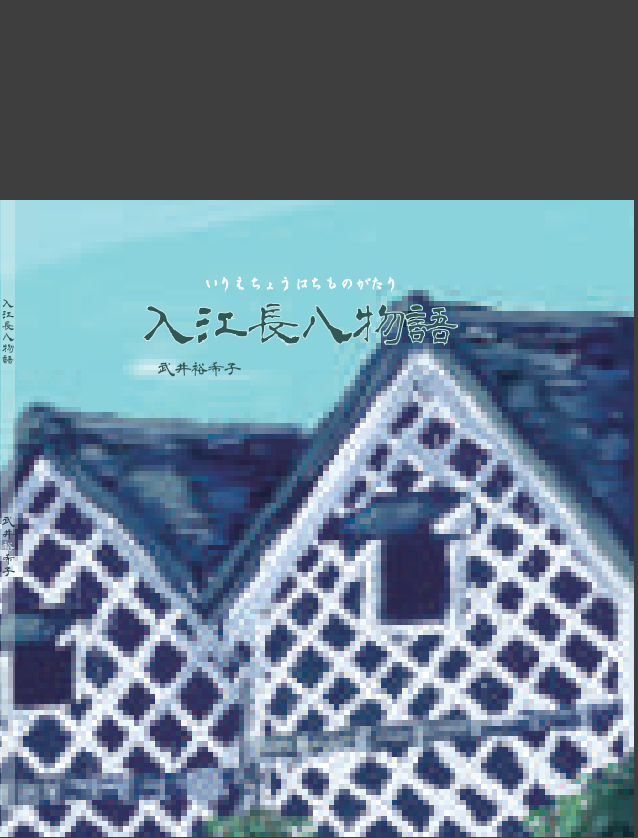
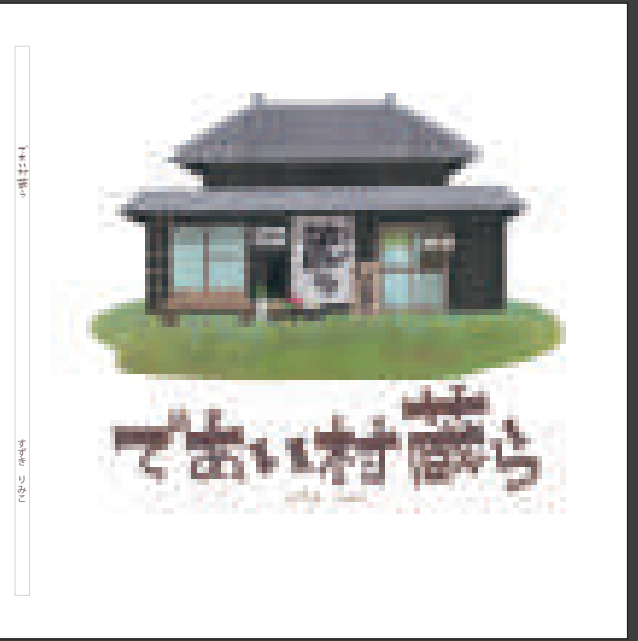
## < 事業成果 >

① 完成したオリジナル絵本22冊(常葉大学造形学部デジタル表現デザインコースの学生17名、タイのシラバーコン大学の学生5名)を12月に松崎町の伊豆の長八美術館1F、伊豆文庫、常葉大学瀬名3号館の3Fギャラリーで展示及び発表した。終了後、松崎町内の図書館と各主要機関に寄贈して町を訪れる人たちや住民たちが絵本を閲覧できるようにした。

② 6月1日から2日まで常葉大学造形学部学生作品 絵本の読み聞かせ参加および展示  
・共催：FULL-SATO プロジェクト実行委員会、NPO 法人伊豆学研究会・後援：松崎町、松崎町観光協会(一財) 松崎町振興公社・大村勇貴作「うーちゃんのまつざき」江崎琴美作「マールくんとやさしいおばけ」読み手：稲葉待子さん 石田初恵さん

## < 今後の展開 >

① 社会環境学部山本早苗先生と本学部チラユボンワルット先生との協力により発展的プログラム実施予定。  
② 松崎町と連携し、歴史や伝承をモチーフとした情報発信・PR の為の作品を制作する。



全22作

常葉大学 造形学部 デジタル表現デザインコース 17作  
シラバーコン大学 ビジュアルコミュニケーションデザインコース 5作



## 2-4

## 藤枝体験型インバウンドツアーの企画と PR ビデオ作成

### 事業担当者

外国語学部英米語学科 木野 結生(代表)、教育学部生涯学習学科 川村 遼亮  
外国語学部英米語学科 成道 小夏

### 目的・概要

藤枝市からの公募による平成30年度地域政策研究・創造事業のうち、研究テーマ⑤「地域資源を活かした広域観光まちづくり」を対象に、「藤枝体験型インバウンドツアーの企画と PR ビデオ作成」との事業名で応募したところ、事業費を交付されて現在 PR ビデオを作成中。

### 事業内容・方法

- ① 藤枝在住の代表学生を中心に、下見を行った後、外国人出演者3名を依頼して2日にわたりビデオ撮影
- ② 完成したビデオを YouTube や旅行会社のウェブなどにアップして宣伝、ツアー客を募集
- ③ 実際に清水港に入港するクルーズ船の外国人観光客を対象に、日帰りで藤枝体験ツアーを実施

#### <地域との連携>

- ① 連携状況：藤枝市市民文化部 スポーツ・文化局 街道文化課（岡部宿大旅籠柏屋での下見と撮影）、藤枝市商業観光課（体験ツアーの実施）、産業振興部お茶のまち推進室（ドローンによる茶畑の撮影許可）、藤枝市陶芸センター（楽焼体験）、玉露の里（茶席体験）、志太泉酒造（酒蔵見学）、潮生館（旅館）、株式会社ローカルトラベルパートナーズ（体験ツアーの実施）
- ② 資金：平成30年度地域政策研究・創造事業（藤枝市企画政策課）

### 事業成果

まだ事業遂行中だが、藤枝市の知られざる観光地としてのポテンシャルを再発見することができた。陶芸センターの館長やローカルトラベルパートナーズの社長など、地域を盛り立てるキーパーソンにも知己を得ることができ、今後の地域活動の幅が広がるように思われる。

### 今後の展開

作成した PR ビデオや、今回のプロジェクトで得た人脈を活用して、実際に藤枝市を中心とする志太・オクシズ地域のツアーを実施し、静岡の山間地振興と外国人インバウンド観光の集客に役立てたい。

# 藤枝体験型インバウンドツアー

外国語学部英米語学科 代表:木野結生、成道小夏、教育学部生涯学習学科 川村遼介

## 1. はじめに

今回私たちが研究する事業の目的は、急増する清水港に来るクルーズ客など、外国人観光と藤枝氏の関わり合いを増やすというものです。外国人客に、藤枝市の魅力を知ってもらうと同時に、藤枝の皆さんにも、自分たちの町の魅力と外国への発信方法について知ってもらう事も目的としています。

## 規格の概要

- 1) 藤枝市英語版 PRビデオ**作製**
- 2) **体験**ツアー
- 3) 外国人観光客の募集・ツアー**実践**

## 3)外国人観光客の募集・ツアー実践



9月、10月の入港するクルーズ船の外国人観光客を対象に、日帰りで藤枝体験ツアーを実施します。この時に、宣伝や声掛けなども学生を通して行います。今実際に、興味のある学生を学校内で募集しています！

## 1) 藤枝市PRビデオ作製

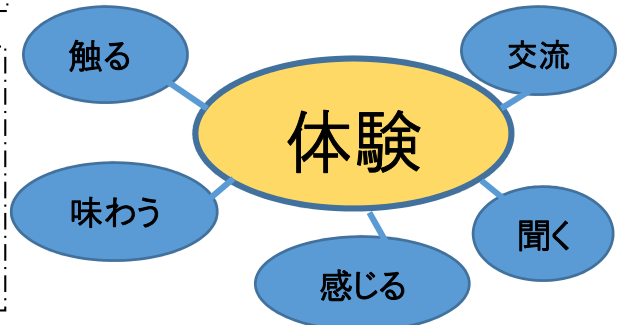


2日間かけて藤枝市を**自分たちの足で周り**、地元の人たちから話を聞きながら、藤枝市の魅力に触れる事が出来ました。改めて、藤枝市の知られざる**観光地としての魅力**に気づかされました。



実際にアメリカから来た3人の方に協力してもらい、**ビデオに出演**してもらうことに!!!  
藤枝市のどんなところに興味をもってもらえたのか調査もしてきました。

## どうして実践型なのか？



## 2)体験ツアー



自分たちが計画した  
場所で、ツアー体験!!

実際に各地を回ってみると、予想していなかったことが起こったり、予定通りの時間で動けなかったり、という事がありましたがたくさんの方に助けられました。改めて、ツアーで各地を回る**大変さを実感**したのと同時に、自分たちの地元を楽しんでもらう嬉しさも感じました。

また、地元の方たちとも**深くかかわることができ**、本番のツアーでも協力してもらう事になりました。

- 1)ただ観光するのではなく、**実際に触り、匂いをかぎ、味わう**ことで藤枝市を「体験」することが出来る。
- 2)観光客の方々に藤枝市の魅力である地元の人々、学生、企業の方々にある**人間性の豊かさ**を感じてもらうことができ、世界にPR出来る。

- 3)若い世代の学生たちが主体となって取り組むことで、**藤枝市を盛り上げていく大きな力**となる

皆で藤枝を豊かに！